単元の言語活動
「自分の文学史」を作る

活動のねらい

文学の歴史として記述された「文学史」を読むと、過去の作品の評価は既に定まったもののように思えるかもしれない。しかし個々の作品の価値はそれを読んだ一人一人が決めるものであり、誰もが自分の「文学史」を書くことができる。そのように「文学史」の発想を転換し、自分が読んだ作品について自分のことばで語ることが、この活動のねらいである。

タイトル・序文の解説

文学の価値の評価は、絶対的なものではない。大切なのは、自分が作品を読んでどう感じるか、どう考えるかである。「自分の文学史」には、あらかじめ用意された「正解」があるわけではない。他人とは違う自分だけの文学史を作ることをめざしたい。

「課題」の解説

課題　古典から現代までの文学（詩歌・漢文を含む）の中から、自分が良いと思うものを選び、「自分の文学史」を作ってみよう。

時代やジャンルを問わず、かつ、既存の評価や先入観にとらわれずに、自分が興味を持つ作品を複数ピックアップし、それぞれの魅力を考えさせたい。

活動の解説

1　古典から現代までの文学（詩歌・漢文を含む）の中から、興味を持ったものを三つ以上選び、それぞれの作品を読み直して、概要（あらすじ）をまとめてみよう。

自分が興味を持った作品について、これまでの読書や授業を振り返って考える。また、概要（あらすじ）は、その作品を読んだことのない人にも理解できるように書くことを意識する。

2　それぞれの作品について、良いと思う点・自分が引き付けられる点を中心に据えて、推薦文を書いてみよう。

その作品を読んだことのない人を念頭において、作品の魅力が伝わるように、具体的に説明する。

3　グループを作り、順番に、自分の選んだ作品とその概要（あ

らすじ）・推薦文を発表してみよう。発表後、順番に質問し、作品の内容や良さについて相互に理解を深めよう。

質問することは、質問された相手にとっても、自分では気づいていなかった点に気づくきっかけになる。相手の発表に敬意を払いながら、率直に質問する姿勢を養う。

4　発表と質問を踏まえて、概要（あらすじ）・推薦文について加筆・修正し、各作品にキャッチフレーズをつけ、「自分の文学史」をまとめてみよう。

発表したときの反応や質問で、その作品の概要や特長が伝わっていたかどうか分かるであろう。加筆・修正した上で、作品の魅力が端的に伝わるキャッチフレーズを考える。

評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。〔知・技〕(2)ア
(3) 時間の経過や地域の文化的特徴などによる言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。〔知・技〕(2)エ
(4) 「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。〔思・判・表〕B(1)オ
(5) 進んで筆者の「歴史」や「文学史」に対する考え方を整理し、「自分の文学史」を作ることを通して、今までの学習を生かして、我が国の言語文化についての理解を深め、ものの見方、感じ方、考え方を深めようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

（佐藤至子）